

1979年7月19日、浦幌町字東山（新四国八十八カ所付近）でイシダシジミ（イブリシジミ）——*Lycaeides susolana iburiensis* Butler——を採集したが、浦幌町においては未記録種であるので、ここに報告する。

19—VII—1979 1♂♀ 十勝郡浦幌町字東山
採集した個体は、ササの葉上で交尾中の雌雄である。採集時間は午後6時30分頃の日没少し前で、気温はあまり高くなく、他に本種の個体は見られなかった。

本種はアサマシジミの一地方品種で、ほかにミヨウコウシジミ、トガクシシジミ、ヤリガタケシジミなどの地方品種が知られており、亜種名としては*ssp. iburiensis*（北海道産）、*ssp. togakusiensis*（妙高、戸隠山群種）、*ssp. yarigadakeana*（北アルプス産）、*ssp. -yagina*（前記を除く本州中部産）などが用いられている。

近似種ヒメシジミとの区別点は、
①本種では後翅裏面1a室(1)、1b(2)及び1c室(3)内側の黒点が三角形状を呈する
が、ヒメシジミでは1a室の黒点が存在せず、1b室内側の黒点はイシダシジミより内方に位置すること。
②前翅裏面2室の黒点(4)は本種では横に長く楕円形なのが普通で、ヒメシジミでは円形であることなどである（Fig. 1）。北海道における本種の最初の発



Fig. 1 イシダシジミ斑紋図

は1a室の黒点が存在せず、1b室内側の黒点はイシダシジミより内方に位置すること。
②前翅裏面2室の黒点(4)は本種では横に長く楕円形なのが普通で、ヒメシジミでは円形であることなどである（Fig. 1）。北海道における本種の最初の発

見は、札幌市定山渓・石山・発寒である。これ以外の産地として勇払郡早来町、留萌市大和田が知られていた（藤岡、1975）が、最近釧路市北斗でも発見され話題となった（柘植、1977）。本州では日本アルプス（関東・中部）のみに産する。

アサマシジミは亜種も多く、また個体変異も多いことから、現在まさに進化しつづけている蝶であると考えられる。

河野廣道氏はイシダシジミを含む9種の亜寒帯系種類が札幌低地帯以東に生息すること、その西南部ではゴマダラチョウなど5種が本州と共に道東北部に生息しないこと、クモマベニヒカゲなど4種が札幌低地帯の南北で亜種を異にしていることなどをあげ、札幌低地帯を昆虫類分布の間衝帶としての位置付けをされている（河野、1955）。これらのこととは蝶の分布域、種の進化などと関連していて非常に興味深い。

（浦幌町農業協同組合営農部）

引用参考文献

- 河野廣道（1955）『日本昆虫記』
白水 隆（1971）『原色図鑑 日本の蝶』
柘植達雄（1977）「イシダシジミなど二、三の蝶類の知見について」『釧路市立郷土博物館々報』248
藤岡知夫（1972）『図説 日本の蝶』
———（1975）『日本産蝶類大図鑑』
松本尚志（1975）「浦幌町における蝶類の分布」
『浦幌町郷土博物館報告』6
円子紳一（1973）「浦幌町の蝶類レポートⅠ」『浦幌町郷土博物館報告』2
———（1976）「浦幌町郷土博物館所蔵の阿部宏氏の蝶標本」『浦幌町郷土博物館報告』7

オルベチャシ跡について

後 藤 秀 彦

オルベチャシ跡は、河東郡士幌町字士幌東16線176番地に所在する臨川性の複塙のチャシである。筆者は1979年1月3日このチャシ跡を訪れる機会を得たので、その際に得た知見の一端をここに略

報する次第である。

なお、この小レポートを書くにあたって石橋次雄・沢 四郎の両先生にご教示を賜わった。記して感謝申し上げたい。

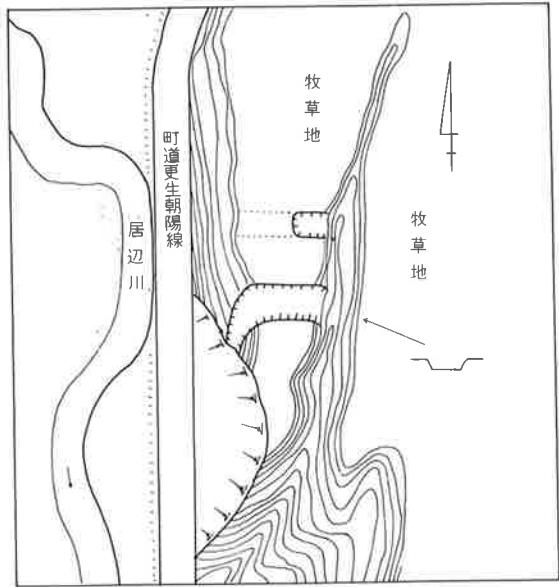


Fig. 1 オルベチャシ跡略図

さて、この「オルベチャシ跡」がいつ頃誰によって発見され、斯界にその存在が明らかにされたのかは詳かではない。それに関するレポート類も見当らないが、そう古いことではないようである。

チャシは、眼下に十勝川の最大支流である利別川に注ぐ一支流居辺川を臨む丘陵上に構築されている。標高 200 m。比高 30 m。壕は 2 本残存しており、外壕は幅 3 m、長さ 4 m を残して埋覆されている。内壕は、外壕から 6 m 離れて幅 5 m、深さ 1.3 m の規模で残されている。内壕は一見直線的に丘陵外へ開口しているように見えるが、斜面側ではやや下って内郭を囲むようにチャシ先端部方向にカーブしている。この壕の最も深いところは前述のとおりであるが、西側の下ったところでは 0.1~0.3 m 内外で痕跡的に残っているのみである。この内壕も、町道更生朝陽線の道路工事の際にカットされた法面により削られて、その全容を知ることはできない。この内壕の沢側（東側）もわずかにチャシ先端部方向にカーブする傾向を示しながら沢内へ開口している。この沢は若く、チャシ構築時にはまだなかったことも考えられる。

このチャシについて特筆すべき点は次の事項である。

①十勝管内のチャシは太平洋岸、十勝川流域及びその大中支流域に存在するのが一般的であるが、本チャシは利別川の小支流居辺川流域に他のチャシから遠く離れてボツンと存在しており、本チャ

シの機能とも相俟って注意する必要がある。今後こうした小河川流域の分布調査を徹底する必要がある。

②本チャシは一見何の変哲もないわゆる「丘先式」のチャシのように見えながら、内壕は崖面側及び沢側で先端部方向に直角に近くカーブしており、壕がチャシ全体を囲むかまたはその一部を囲むといったようなお供山形にも似た形態を示すことである。したがって、外壕は丘先式のように、内壕はお供山形のように作出されているということであり、かつて河野広道が 4 分類したものには概にはあてはまらない（河野、1958）。こうした例は、十勝管内にあっては、芽室町丸山チャシ・陸別町成人の森チャシにも言え、一見陵に直角に直線壕を 2~3 条構えているように見えながらも陵に平行する斜面部にはわずかながら浅い壕の存在が見え、お供山形に作出されるが、壕が内郭を囲む形態に作出されているのである。そして、これらのチャシでは、壕を掘った際の土を内郭の斜面に貼り付け——特に崖側では——、チャシ全体を整形した可能性も考えられ、壕掘削の際の土の処理は崖下に廃棄されたものと、利用されたものとがあると考えられる。

③本チャシのように人為的に削られたチャシを含めて、風雪雨や河川浸食によって削られたチャシの壕及びチャシ全体の復原を考える必要があり、より古いチャシの地形図・略図は大いに参考になるところである。特に本別町内利別川流域のチャシの大部分は崩落寸前であり、今後の調査を不能状態にしている。（浦幌町郷土博物館学芸員）

引用文献

河野広道（1958）「先史時代篇」『網走市史』

網走

1979年12月25日 印刷

1979年12月31日 発行

編集後藤秀彦

発行責任者 家村克行

発行所 浦幌町郷土博物館

北海道十勝郡浦幌町字東山町23番地

印刷所 大同出版紙業株式会社

北海道帯広市西7条南6丁目